

登録コード	UAB03600	開講年度	2026			
授業題目	文化情報論・社会学AR I				担当教員	菊池 聡
					副担当	木村 宏人
単位数	2	講義期間	前期	曜日・時限	火曜・5時限	
			授業形態	演習		
信大コンピテンシー	該当					
(1)授業の達成目標	授業で得られる「学位授与の方針」				⇔	【授業の達成目標】
	2 6 UAカリ・総人社・人間文化学, 2 5 UAカリ・総人社・人間文化学					
	【人間文化学】人間文化に関する文献・資料を収集・調査し分析・考察する人文学の伝統的な手法を身につけるとともに、他の学問分野の解析手法を併せて修得することによって、複雑多様化する現代社会の課題に柔軟な対応ができる応用力を有する。				⇔	人文学の中でも、社会学や心理学の学際的領域から、現代の社会の諸現象を批判的に分析することができるようになる。
	【人間文化学】高度な言語運用能力とコミュニケーション能力を基盤として、多領域のステークホルダーと協働し、現代社会の課題に取り組みながら、独創的かつ多文化共生的な英知の創成と提案を行う力を有する。				⇔	社会的観点を持つ研究プロジェクトを立案・実施・発表する過程で、多くの関係者と連動しながら自分の計画を実現するための十分なコミュニケーション力を身につけることができる。
(2)授業の概要	地方活性化、観光振興、多文化共生、環境、災害対策といった現代の地域社会の共通課題への問題意識をもとに、複数の学生で共同して調査研究のテーマを決定する。このテーマは、各自が専門とする修士論文のテーマとは異なるものとし、毎年ディスカッションの上決定する。調査方法論や調査倫理を踏まえた上で、調査方法の決定、調査企画と設計、仮説構成、調査票の作成、サンプリングないし対象者・フィールドの選定、実査、調査データの整理、比較的簡単な量的分析 とグラフ作成、質的な分析、以上に基づく報告ペーパーの作成などを行う。 また、調査にあたっては、自治体や公共組織などとの関係を学生自身が企画し実現する。学部学生が行う調査実習に指導的な立場で連携することもありうる。本実習への参加のためには学部卒業レベルの推測統計学・多変量解析などの理解と、統計分析を実行できる能力を習得していることを必要とする。 社会調査データの応用的な分析と価値のある情報発信に取り組む文化情報論社会学ARⅡ（応用分析）とセットで受講することを推奨する。					
(3)授業計画	授業計画 授業内容と進行は、地域での調査実施の都合にあわせて柔軟に変更される。 第1回：社会調査を用いた実習の概要について理解する 第2回：地域社会の現状と課題について知る 第3回：具体的なテーマと調査方針をディスカッションの上、決定する 第4回：詳細な調査プランについてディスカッションの上、決定する 第5回：先行研究の精査と発表をもとに仮説を構成する 第6回：仮説構成にかかわる問題点を理解し、仮説を精緻化する 第7回：調査の企画設計と組織・自治体との連携についての注意を理解する 第8回： 実施可能な調査票を作成する 第9回： 調査票の試行と項目の精査改良を行う 第10回：調査票の配布もしくは郵送などの調査実施に着手する 第11回：調査プロセスを進行させ、調査票の回収に取りかかる 第12回：調査データの整理（コーディング、データクリーニング）の実施 第13回：基礎統計量を整理する 第14回：情報の表現と可視化表現を行う 第15回：調査の振り返りと反省会を行い調査の企画設計に関する認識を深める 期末試験は行わない					
(4)成績評価の方法	学生は調査の(1)調査の企画設計(2)調査に向けて外部機関との連携活動(3)一連の調査実施プロセスの遂行(4)データ分析と報告ペーパーの作成の四過程に参加することを前提に、それらに必要なタスクを遂行した水準を評価し、各25%×4=100%の評価とする。評価基準は得点率90%以上を秀、89-80%を優、79-70%を良、69-60%を可、59%以下を不可とする。					
(5)成績評価の基準	社会的意義やオリジナリティの非常に高い社会調査を、関係機関と連携して企画・設計・実施し、直接授業で扱ったレベルを超えて分析・集計が滞りなく完遂できる知識と能力が修得されていれば「卓越している」と評価する。同様に、社会的意義が十分に高い調査を関係機関と連携して企画・設計・実施し、適切な分析集計が遂行できれば「かなり上の水準にある」と評価する。社会調査のタスクが、専門社会調査士として必要な水準を満たして実施できていれば「やや上にある」、社会調査のタスクが大きな瑕疵なく最後まで実施できていれば「その水準にある」と評価する。					
(6)事前事後学習の内容	実際の調査手法や分析手法・データ解析のプログラミング法などは、授業中には要点の解説を行うので、調査や分析を実施する前には、各自が事前に応用可能なレベルまで事前学習をしておくこと。					
(7)履修上の注意	本授業参加にあたっては、社会調査士取得相当、もしくは公認心理師取得相当の推測統計学の基本（統計的検定や多変量解析）が習得済みで、自力で実施可能であること。社会調査データの応用的な分析と価値のある情報発信に取り組む文化情報論社会学ARⅡ（総合調査法）とセットで受講することを推奨する。					
(8)質問、相談への対応	信州大学のLMSであるeALPS上に、質問や相談への対応システム（バーチャルオフィスアワー）を設定してこれを用いる。これに対応できない相談等は直接対応するので、eALPSのメールシステムから直接教員へメールし、アポイントメントを取ることを。					
【教科書】	佐藤郁哉(2015)『社会調査の考え方』（上下）東京大学出版会、					
【参考書】	浦上昌則・脇田貴文(2008)心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方,東京図書 上野千鶴子(2018)情報生産者になる,筑摩書房					

【参考書】	今井耕介(2018)『社会科学のためのデータ分析入門』（上下）岩波書店. 永吉希久子(2016)『行動科学の統計学』朝倉書店. 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版 ウド・クカーツ(2018)『質的テキスト分析法』新曜社.
-------	---